

あとがき

十数年前、母校である桜城小学校の子供たちに、戦時中の小学生のことについて話をしたことがあります。かなり理解させるのが難しいテーマなので、それなりに視覚にも訴える工夫もしながら説明したつもりでしたが、六十年という時間のギャップはあまりにも大きく、子供たちの関心をつなぎ止めることはできませんでした。

そのうちに私の孫たちも小学生になり、私に子供時代の話をしてくれとせがむようになりました。できるだけ手元にある文献や写真などを見せながら話をしてやるのですが、あまり実感はわいてこないらしく、「盛岡では？」「ジジは？」という身近な話題になると適当な資料も見当たりません。そこで子供の頃のおぼろげな記憶をもとに絵に描いて見せると、これが意外と効果があつて、孫たちもかなり興味をしてくれました。孫たちは今は水沢に住んで居りますので、暇を見ては話の続きを絵手紙にして送るようにしており、これは今も続けております。

この絵手紙が、盛岡タイムスの「フォレスト」にとりあげられ連載が始まりますと、昔の小学校の同級生からは忘れかけた情報やエピソード、思いもよらない昔のゴシップなど種々雑多なニュースがどんどん寄せられ、今ではどう整理したらいいか困る程になりました。最近そんな友人たちからまとめて本にしたらとけしかけられ、とりあえず小学校入学から終戦までのエピソードを当時の子どもたちの目線で五十話にしぼって発刊してみることになりました。

とかく私たちは過去の記憶の中でも思い出したくないことは、心の奥深くしまいがちで、特に「戦争」というと話すのも嫌だという人も居り、忌まわしいことに蓋をしてみたいという気持はよくわかります。確かに私たちの少年時代は、戦争の影に怯えながらの毎日でしたが、反面、友達と自由に野山を駆け巡りながら、それなりに楽しく充実した日々を送っていたのも事実です。「外で遊ばない、外で遊べない」今の子供たちが失ってしまった大事なことを体験できた貴重な時代でもあつたように思うのです。

私たちには私たちが生きてきた足跡の是々非々を正確に明快に次の世代に引き渡す義務があると思います。この本はそういう立場、つまり私と同年代の方々にも是非目を通して頂き、若い世代の人々と接して下さるように、文章や言葉では表現が難しい部分を特に絵の中で吟味したつもりです。

最後に出版にあたって、いろいろご助言くださった多くの友人の皆さんと、出版元の盛岡タイムス社に心から御礼申し上げます。

平成二十一年五月十日

菅 森 幸 一

わが家の庭に

家内が手塩にかけている

先祖伝来の牡丹の木があります。

最終原稿を書き上げたこの日

奇しくも紫紅色の花二百余り

一斉に咲き揃いました。

奇妙な偶然に感慨をあらたにしています。

